

173

336

# 再来田舎一休

明治十九年九月刊行

有益館藏版

202059-000-2

特21-945

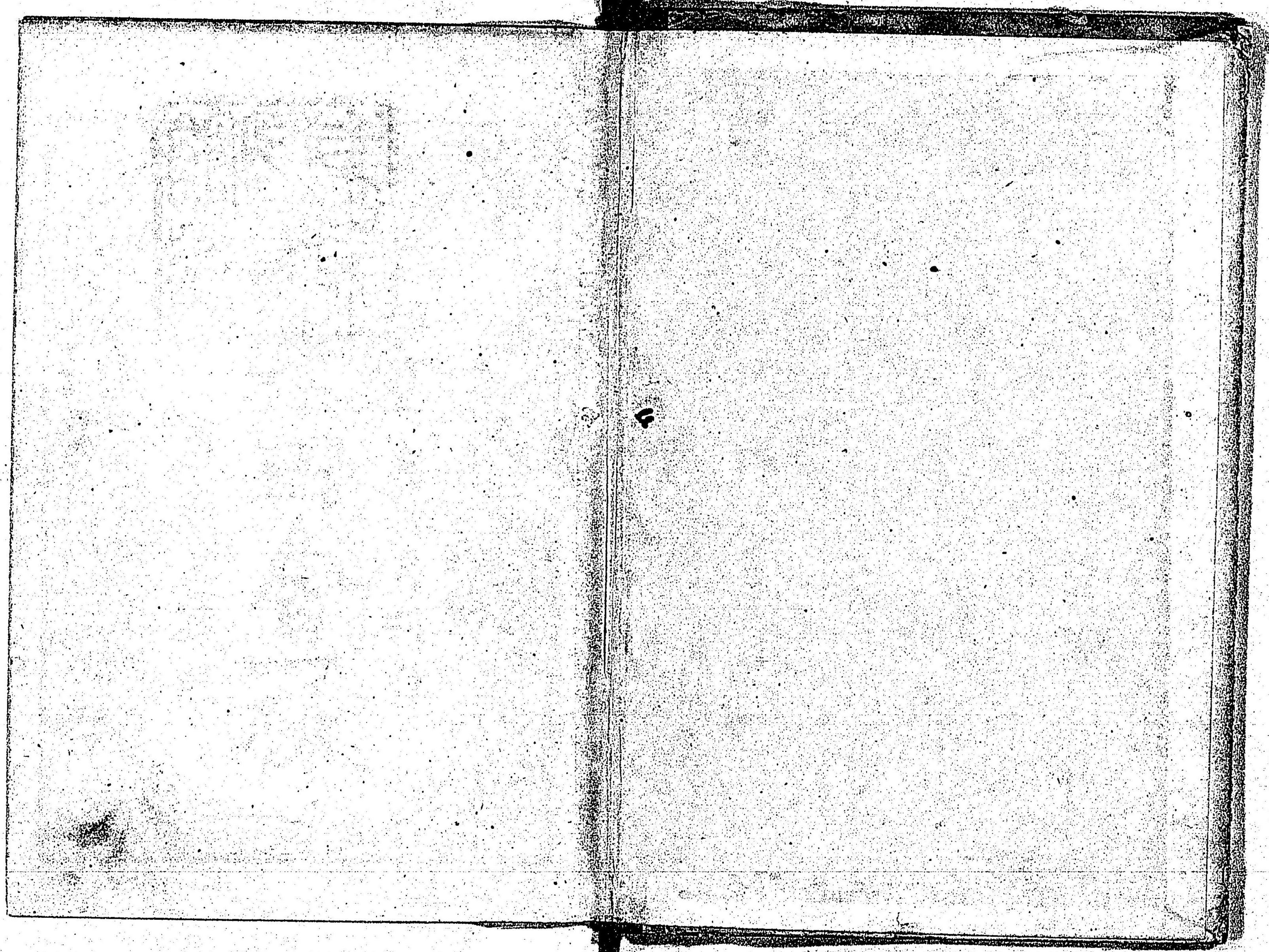
再来田舎一休

佚齋 樗山/選

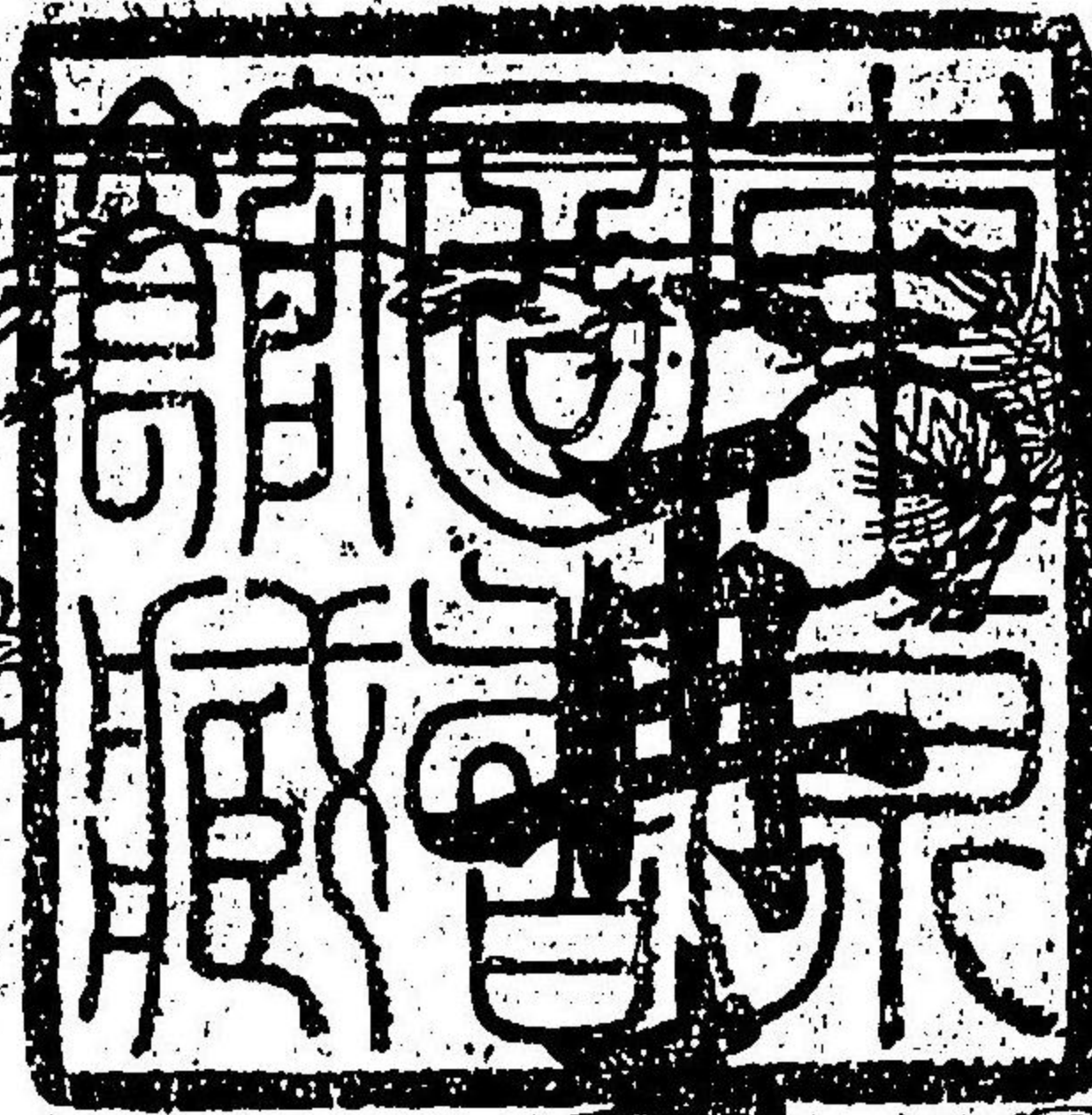
M19.9

EDB-0065





特21  
945



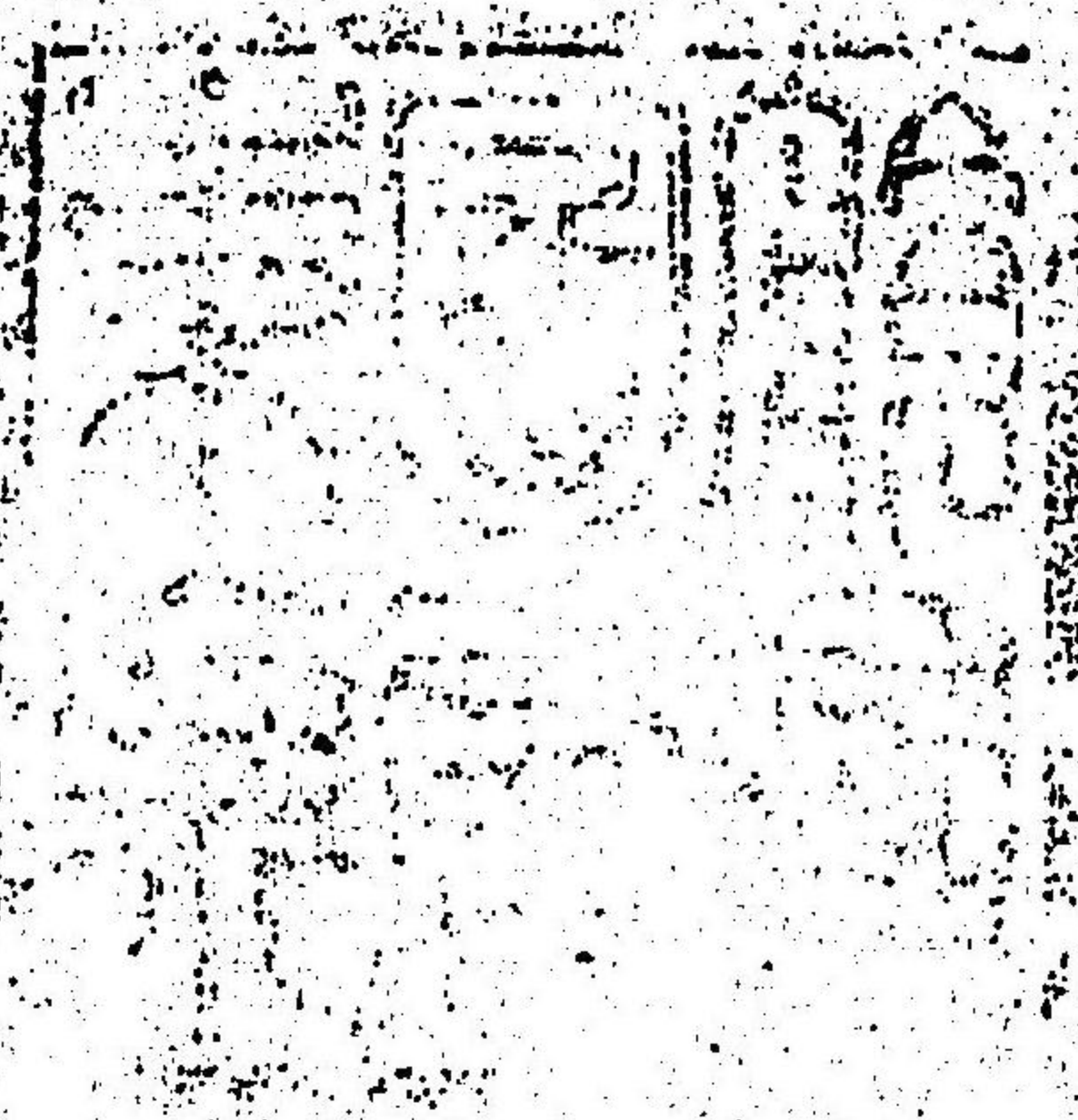
明治十九年九月刊行

朱田舎一休

有益館藏版



明治十九年九月七日



再來田舎一休序

鐵丸吞給ふでをなし。乾坤を打破すべきはをなし。食とあるを亦役する乃み。究境す。我も應せぬとは。天を責めぬ。人を求め。富士山茨頭市。湘田乃橋茨帯にとは。人をいひ。我もな。さき。昔の日田舎莊子といふ文あり。序せよといふ。諾して序。今はた田舎一休といふ文あり。亦序せよと。諾え。序。若人あり。再來一休意如何と問は。此書に向て看取せよ。我な。んど一休を知らんや。唯知ぬ。田舎一休と。田舎莊子と。是同。乃文。知りぬ。海とを以て應じて序とすと爾云而耳。

昔享保戊申秋八月日

劉山郭

再來田舎一休目錄

一休再生

并觀江新六開悟

衆僧法問

淨土法華之宗論

并二休判斷

儒佛一致別談

并氣隨我任

あやはる乃起

自性之問

同異并見解

一念彌陀佛即滅

再來田舎一休

無量罪之法門  
見性成佛

悟

惡心情欲

三世之辨

因果業報之辨

念佛題目之主意

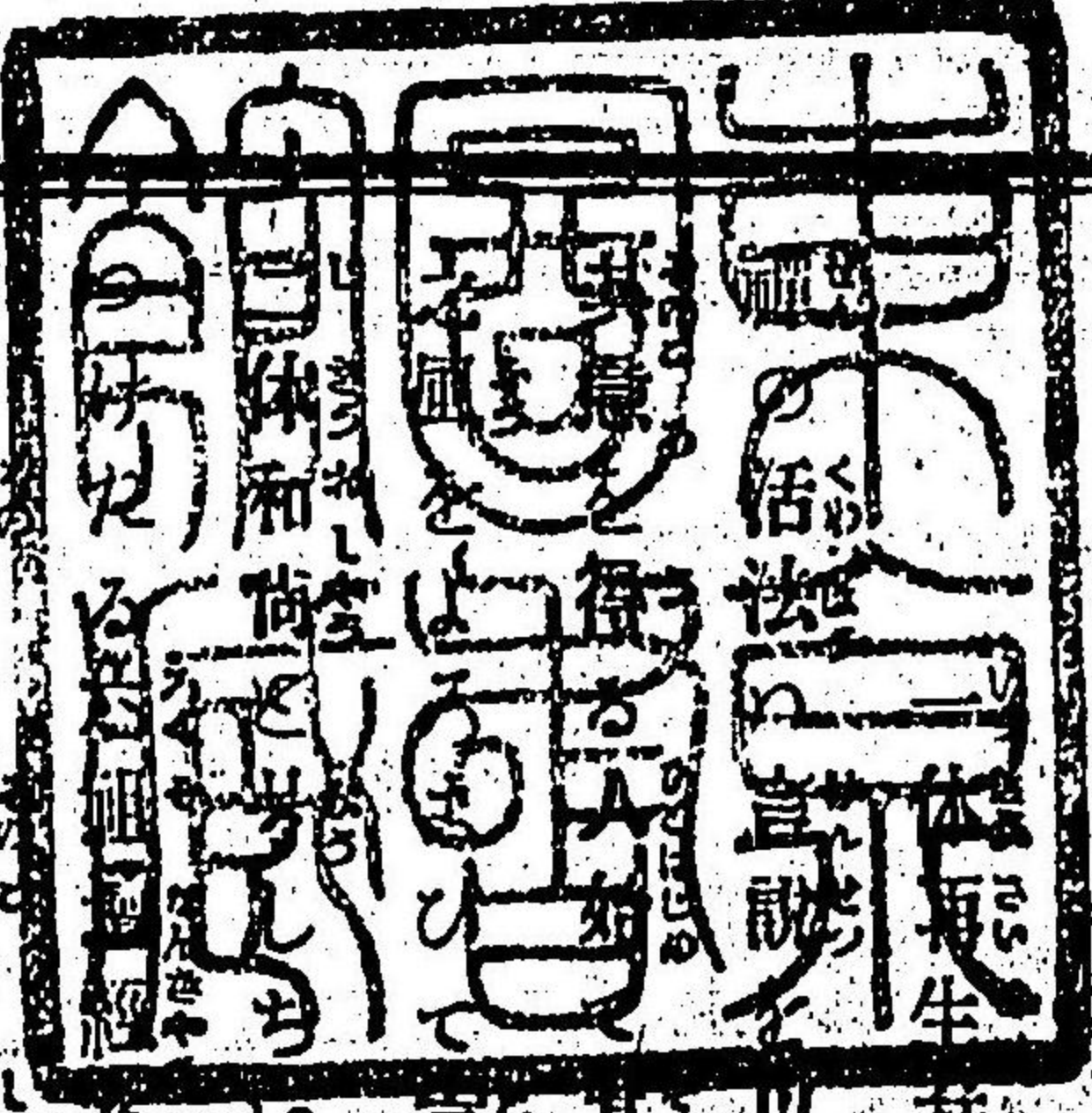
六祖之行由

并達磨之終

主意

再來田舎一休

東住士 伏齊 楞山 妄選



并觀江新六開悟  
以傳ふべのら老水を飲て冷煖みゆから知るごとく  
其味を知べし關東之片田舎に一人の禪僧あり一休  
言と恣にして情を不飾黒衣の平僧にしてみづから  
いささ草庵を結ひ棚のうへへの所くに墨とよじり  
乃外の書といふ物も見へを其郷に觀江新左衛門と  
いふ者あり其子よ觀江新六すまじ文字とも覺えたりしが彼僧乃氣象  
我れもしろくたれもひ常に往て遊けるがあるとき新六尋けるの御僧の  
もど何方之産にして此にの來りたまふぞと云僧乃曰我の昔の一休の  
再來なり久しく泉下よ在て地虫にせられ退屈しればがりよても



なを言殘したる事もおぼけれの少亦娑婆へも出たやれもひ釋尊へ其  
旨親けれの勝手次第と仰出せる前身既にひらさき野に在て都乃邊の  
珍しからば此度の關東乃片田舎へ出生す辱きと思ひお乃とあるへ生  
れ出たりといふ新六日大乘の二のりもなく三のりもあく何とて二休との  
つきたまふぞされの其事あり前身一休之歌よ

有漏路より無漏路にかへる一休み

雨ふらばぬれかせふかの路ぞ

さやちよばかり心得ての一東とらまへよて氣乃つまるゆへに我もま  
たかやあむ

有漏路より無漏路よかへる一休の

また一休み娑婆へ出てけり

出る思入る思ともよ二休み

息か絶たら死ぬるべりよ

伊勢の照る鈴鹿とをもる二休み

あいの土山歌てやらなむ

新六日出入の息か絶れと死ぬるの誰も知たるおとなりまた伊せと照  
るす、かの曇るあいの土山歌てやると云は馬かた曲のうたあり御坊  
の人を嘲弄したまふかといへと僧曰いや嘲弄にはあらず教なり其方  
の佛法乃極則を知り給とぬゆへよ其不審あり誰も知りたるおどが即  
佛法なり人乃知らぬ事の佛法にあらざるををしへにもならは何の  
用にもたぬ戯おとなり昔蜷川新右衛門道歌をよみて一休乃許へ遣  
としける其末に

お乃歌乃お、ろのしらしをそらくの

釋迦も達磨も定家家隆も

一休返歌

釋迦達磨定家家隆もまふぬ歌

くそ乃やくにむたぬ成けり

只佛法乃みにあらは聖人の道も人のまりてよくとこなふへき道あり  
中庸にも夫ぬの愚不肖も興り知るへまよく行ふ處しとあり佛法とい  
ひ儒道といひ人のまらぬ道あらぬ犬よくれても喰ふ處からと又馬か  
たぬしと宣へとも大舜の芻蕘乃言をとりて用ひ孔子も孺子滄浪乃歌  
を感嘆して弟子にしめしたまへりおたいにしへ乃良將の田夫野人の  
まじさを見て直しとりて軍中の謀は用ゆるまとおぼし天下不可用乃  
物なしと皆を乃れが好悪乃情に執し意識乃私と以ふせくゆへに可用  
物用をなさき只自己心上に向て尋給へ物哉是非する心を以て物に向  
とさひ天下乃事物皆お乃れが是非乃柵にかつて心休の妙用をふさ

くゆへに自性之靈覺照しを失ふて目あれとも見るまど明かならむ耳  
あれども聞くまど通せまおれ人の興り知るとおろにあらすみゆから  
とのれど不自由にするのみ新六言下に大悟を謝して曰吾誤れり吾わ  
やまれり曇ると照はとはせ明と法性となり土の中道實相あり無明法  
性の際に休して生死の山阪を小歌ふしにて超あむる豁達流行實く有  
りかたさかしへなりまた聖學を以て語らぬ直に陰と陽となり土の中  
和の氣あり陰陽變化の際土と以て和す故に三良の土の東北の際に倚  
三坤の土の西南に位は文王後天の易に契る僧喜ひて曰く善哉く  
客の一を聞て二我知る始て興に馬かた節をいふ處さのみ

宗僧法問

まの邊乃僧ども密合と二休の口かしまさ坊主なり同しよと我一度よ  
問てこまらせむと大勢いひ合と二休か庵乃外も隠れ居てまゆ一人内



に入座に著とひとしを大聲して曰いか成かこれ祖師西來意二休曰意  
 來ふんと欲して來る僧曰正當恁麼の時如何答曰草鞋を脱て食に就茶  
 を飲む僧曰食就茶と喫して何とかいふ答曰口は任せといふまた自性  
 を不離僧黙して退や又一人來て問如何成か祖師西來意答曰鷲の飛  
 て天は戻り魚の淵に墮言いまた既らざるに一僧走り來りて問いかあ  
 るか祖師西來意二休兩足を踏み出して曰是あるが故に來る此僧門  
 を出るとひとしく又一人來ていかなるか祖師西來意答曰汝乃生す  
 る所とまらぬ祖師の西來意を知らぬ僧曰四大仮合して此は來る何の  
 知りかたきふとあらん二休曰汝何れ用ありてか四大仮合して此は  
 來る僧曰是見性成佛のために來る二休曰黃蘗言るまどあり自性本來  
 非因非果と何れ仮に和合を以て自性を求めむ汝今生死は沈淪せり  
 一棒に打死して汝の妄縁を斷むと云て天秤棒をおりとりずれぬこの

かなしといひ捨て迹をも見ずして過去に其跡よりまた一僧來て曰  
 如何なるか佛是佛答曰門前の石地藏僧曰石は化益ありや答曰有又無僧  
 曰一佛何ぞ有無ある答曰既佛体は作る是を見て善心感發する時の  
 是化益なり經に見て過る時の化益なし此僧はまた門を出さるま  
 た一僧來て問如何成か佛答曰庭前の塊問塊何の佛ぞ答曰草木國土  
 悉皆成佛問塊成佛して何の功德ある答曰五穀を生して人を養ふ壁は  
 ぬれぬ寒を防さかせを避言下は一僧來て問如何成か佛答曰塊中の  
 蚯蚓僧曰蚯蚓に奇特ありや答曰無欲として他に求なし僧曰是隱者な  
 り菩薩の行はあらん二休曰是うその薬と成て人の痛みを救ふ何に利  
 益なしといはむ又一僧來て問いかなるか佛答曰佛性を知る鼠の佛性を問ひ其次に  
 年若成僧椽先に立つ立あかり大音聲をわけて曰不慕諸聖不重己靈

時如何二休もまた聲を屬くして悟則青原迷則提婆と云てとびかゝり  
蹴倒しけれのころひたおきて遊ぐゆゑ

他日亦禿髮比者來と問

寂滅本無樂 說三摩爲樂

答曰

無樂卽爲樂 無有生滅

儒士あり來り問

日出而起 日入而休 怎麼生是生死 一大事因緣

答曰

還於父母未生以前來

他日色衣比僧來り靜に座して作禮し拂子を執て問曰

明見山頭月

答曰

淨雲道裏生

御用心く來る者に答へ願くことなしみな舌と捲て歸る

淨土法華宗論

新左衛門の淨土宗なり妻の日蓮宗なり今日の彼岸の中日なりとて流  
左衛門の淨土寺の貞譽上人を招待して村中の同行をあつめ法談を初  
め多れの女房もまけしと法花寺の日立聖人を招待してそこらあたり  
の同行を集め同しく法談を初めけり淨土寺の貞譽上人敬白の鐘をふ  
らし十念事終りて曰從來勸化仕る通り人のいけまでも死なぬ物とお  
もふとあろよりおしきはしさにくみかじゆきの情よひかれ富貴され  
の獨身の歡樂を極め慈悲と云ふまゝの露ばかりもなく貧賤なれ  
世は陥ひてれんを專として人の物をたまたしてやる巧みばかりを心と

して因果をもおそれ三寶をも信せし僧法師をいまくまきとて  
 一座をのいやり堂舎佛閣の奉加帳をい虎狼よりをおそろしむるに  
 一身乃榮耀に水をかかすかまどく金銀とほかへとも佛乃供養に  
 一錢おもをしみ夢の間の命を大切のおとにおもひ後生のおとを  
 へあけてたもひ出しもせせうかくと暮したまふ内に閻王の使來る  
 とひとしくおてまのしといふことならす參付湯よ獨參湯よとてさ  
 びまどもどかくゆるさぬの死のみち也まのときに至て金銀を山の如  
 き蓄持たりとも一錢も身につかば日比の綾羅錦繡さやちりめんを身  
 よまどひ隣ありきにものり物よかいりへよとて大世の供をりれてあ  
 りき給ふ貴人高位の奥方もすかたひら一枚にて下女の一人も附隨ふ  
 おどおく青竹乃杖にそひたいよ万字をあて歩はたしよて死出の山を  
 こそこえ三途川の邊にていおそろしき焼出と一枚着たる帷子をさへ

はさどれ丸裸の仕合にて六道の辻にさまよひ給ふところを悪業の  
 鬼ども鉄杖を提て迹より退立ゆくありさま餘所の見る目も笑止千万  
 なる御事かりいかやどかこの時に前非を悔れどもかへらぬの地獄の  
 みちなり然るゝありかたくも如来他力の本願光明偏く十方世界を照  
 し念佛の衆生を接取して捨てたまひす常くおこたらす唱へたまへる  
 人の彼稱參會佛即救世舟となりて三途川の邊よりかひ彼焼をまか  
 り付鬼どもを追散し廿五の菩薩伽藍に音樂を奏し生死の海をやすく  
 と打渡り彼岸よをし付れの閻王大王供生神も手をさすまどもなら  
 び視目嗅鼻わたりへもよりほかほまして業の秤にかゝるもあく一  
 彈指の間極樂浄土に至り彼國へ往く見れぬ娑婆にて佛に費し堂  
 塔伽藍の供養に入僧侶に施したる金銀財寶さるのうちへあけ入給ふ  
 錢ども十双倍百も倍も成るよき出利に利のつくる車かしの錢よりも

甚し一生乏しきおとなく常に八功德地の蓮華を弄し金銀の砂を手玉  
 にどり風聲水音鳥乃囀りま々皆續經の聲にして悟の種もあらはとい  
 ふことなくいほまでも死ぬといふるなしかち結構成國に生る、こ  
 とを不願して夢幻はあどくある娑婆世界を残りおぼくねもひ給ふの  
 何事とや箇様も力おも出さす戒律讀經の苦勞もあく座禪觀法の六ヶ  
 鋪まともなく此身まのこ、ろよく手間いらはは佛にあるまといひと  
 へに阿彌陀如來の御本願他力念弘の奇特なり只明をも暮ても忘を給  
 ふましきの御念佛の一事なり末世下根の衆生自力に修行に乏く無量  
 却を経て成佛のなふぬに極りたり然るは日蓮といふ我慢偏僻の  
 とんでき坊主念佛の申たけれども人のま絡をするのいやあり何かな  
 替りたることをせんとねもひ法華經の題目にせうひけを作り念佛  
 とすり替へ念佛の無間の業なり此法華經をそ女人成佛の妙典あれ四

十餘年の説法の示前經とて皆むたむなりとの、まり愚痴ある女人を  
 す、めこみだましよきとあろより諸理と付くとり入ものあり釋尊御  
 一代三世の諸佛に如此ひけを作り給ふまをさかむこの一色よても  
 子ともまかしのたはこと成あを知らし夫念佛の阿彌陀如來の名号  
 なりまの名号唱ふるもの直は阿彌陀如來に向ひ奉り助たまへ南無  
 阿彌陀佛と至誠心をおこしきたのみ奉るものなり妙法蓮華經といふ  
 の法華經の題号あり儒書といはく大學中庸論語孟子といふがことし  
 外典の學者四書の外題をとなへあれのとて明德も明らかになるるか  
 らは一貫傳授の心法よも通べからは此分にても合点せらるべし釋迦  
 如來韋提希夫人にあめに勸經を説給へは五百人の女官一時に成佛し  
 たりとあり然るは文殊菩薩龍宮に入て法華經の五ヶ卷持法品を説給  
 ふとき成佛しある者とりかへ龍女一人也其外に一人も此經にて女人



成佛したりと云を門に龍女一人を以て女人成佛の證據とするの  
 欠たる田結也釋尊山をわて法華を説給ふとき五千人座を立や  
 ぶり遊たりとあり佛在世よさへ世俗乃耳に不難き法華經と末世の凡  
 夫は受持せよとぬふの二三歳の童に四斗をかりけ大八車をひけとい  
 ふがことし是をこり微力の犬太刀なま兵法大疵のもといと申なり  
 是は依て日蓮のそこよていふまれ此にていた、かれわたまは疵を蒙  
 り土の半へをしこまれても情のこはきいやまぬなり龍の口におゐて  
 首とさるる、よ極りたりしを大覺禪師はれみ給ひ鎌倉殿へ佗言の  
 りやうく命たひかりしを六老僧や且那とも江の島のかたよりひか  
 り物とひ來り太刀とり目をまひし刀がおきたるふとなまくとし  
 たるうそを注置讀と云書よのせたりかならぬだまされて地獄へ落給  
 ふなど高聲にの、まれの一座の同行聲を揃て南無阿彌陀佛といふ聲

の家も崩る、のかりなり奥の間にて日立聖人開附談儀を止てをどり  
 出やいうこならうたへ坊主法華の行者とりしる者のあらくよ沈むと  
 いふるを知らすや况や我か高祖日蓮大菩薩は上行并に再來にて衆生  
 の念佛と申の地獄へ落るものを救ひむためにかり、房州小湊も出現  
 し給ひ一命を法華經に奉り數度の御難も逢給へども少しもいとひ給  
 ひは不惜身命の佛勅に任せよの大願を成し此一宗を開き給ふ凡夫の  
 なるへさどころにわらす是に依て大葬とは号するあり汝か祖師の法  
 然の親を夜盜も打殺され身の置どころあさま、に愚昧よして經意も  
 も通せたまして一念三千の理もとからす是は依ていま、て讀し法華  
 經を捨閉擲抛とそしりて善導法師が一向守念の念佛を見付くつきや  
 うの物とささけと悦ひ夫人のため説たまふ子供すかしの三部經を  
 依經として易行の念佛これ大乘乃法門なり是をさへ唱れ極惡乃罪

人もこゝろやすを佛よなると勤め悪人のゆるしを出し善行を妨げ愚痴の根又糞をする不便やあ今まで幾千万の人か此念佛を申地獄に落て有らんと涙をさへかたし是より我か高祖大菩薩も念佛無間とは宣ふあり他方の本願とて亦にむかも打止て彌陀一佛にうちまかせぬくくとも悪心から佛よあらんとねるふハ盜賊よりも大膽あり釋尊四十余年の御說法悉く法華一部のうちに販しあり故に法華の諸經の問屋あり餘經ハみち法華の出見せありとり分汝か信する三都經ハ子ともすかしの鞠をさうたあり然るに念佛の一行を以て法華の功徳にまされりといふは犬の糞を以て黄金にまされりといふか如し念佛かそれ程に結構成物あれハ釋尊四十余年の說法をやめ念佛の功徳はかりを説給ふへしこれちどのゆハ子どもの智恵もしきあるあり御亭主地獄へすきあらハ各別左もあくハかあらす賣僧坊主にぬ

まさきて無間の底に落給ふあどたかひに袈裟も衣も引やぶり大はだぬぎにありて取あけり

二休貞譽日立どの法問

かゝるところへ二休托鉢のため来りければ嫡子新六早く見付能さ所へ御出候物かなまづ御わかり候得とて奥の間へ請し入御存知乃通り兩親浄土と法花にて毎度宗論仕候か今日の彼岸の中日とて双方の且那坊主参られ別して騒しく御座候出家衆にハ御がまひかく兩親へよく御おめし被下候得と申けれハ二休日法に別法かく佛に別佛おし是ハ何を論し給ふそといへハ亭主新左衛門罷出女の愚痴ハ珍しからぬゆゑ候得とも我等の妻ハ夫のをしへよも随かハす世間宗旨も多きよかの情のことさかたまり法華罷成日蓮かひけ題目を信仰いたし我等の申候念佛をハ無間の業とて耳をふささつらをしめとい

やかり申候あの根情にての死ぬとひとしく犬や猫に成て蓄生道をう  
 るたへありき我等の極樂へゆくを見ていかなかり後悔可仕候得と  
 も其時の我等もすなやうもあく不便ながら南無阿彌陀佛といひ捨  
 てるより外の事の御座あくは故只今色々に勘申候得とも悪業乃耳  
 へ且て入申さる候却て腹を立申ひうぬかましとは存候得とも餘り  
 あさましきこととて御座の間和尙さま何とぞ御勤め被成餓鬼蓄生の  
 業をすくひて御とらせ被下候得かしと申けれの女房罷出まつ和尙さ  
 め御聞下され候得さあきたに女人の佛又すてられ五障三從の罪ふか  
 うかふへさ便もあく候ところ幸に聖人さまの御す、めにて逢かた  
 一乘妙典の法花を授持し奉り題目を唱へ申候ところをさまくの  
 やまを入其中の鬼の餌食に成候とは物好にて候得の笑止あから  
 是非に不及とて候ところ私までをす、めて地獄にをとす巧をつ

かまつり候これの何としたる悪業にて御座候哉と泣眼に成て申けれ  
 の二休曰夫婦ともにはのみ氣つかひし給ふあ犬にも猫にもなる物に  
 ての侍ら死とひとしく豆腐こんにやくにありて鬼までもやりたて  
 且早速坊主の餌食にあるに極りたり浄土も法花も是に相違のあきま  
 とありかならず疑ひ給ふるからとといこれけれの次の間より日立は  
 つと出これのうけたまはり不及法門ありいつれの經に出しやといへ  
 の二休笑て我等の宗旨の教外別傳不立文字逆經論をどにか、るま  
 は侍らす直指人心見性成佛の法あれの佛に逢て直に聞たりといふ  
 日立それの何方にて佛に逢給ふぞといふ二休曰釋迦に寂光土に  
 て逢阿彌陀に安養極樂淨土にて逢たりといふ日立か日はは誠しか  
 らは何として寂光土へ至り給ふぞ二休曰御坊の讀給ふ法花經に娑婆  
 即寂光土とあるからいまる寂光土に居るあり六祖曰心まよふ時の



法花に縛せられ心悟る時の法花を縛すといへり御坊の迷て法花に縛  
 せらるゝ者ありと口をわいて笑ければ眞譽曰十万億土の西方へい  
 つの間に行き給ふや二休まよふとき八十万億土悟るとき去此不遠  
 あり其上誓願寺の本尊の毎日一度つ、西方淨土へ通ひ給ふ彼諸にも  
 みへたり木像さへ毎日かよふあらん我の生物あり一彈指の間に五  
 む十度も往來さ也惟心の淨土を見付すしてはるく遠き西方を尋給  
 ふやいつれもく文盲ある御僧達かあと手と打て嘲りければ日立腹  
 にそゑかねて惣して禪坊主といふもの佛をの虫とも思ひぞ打死し  
 て狗に陰せんあと慮外をぬかすのみあらず丹霞といふ氣ちかい坊主  
 人の安置したる佛像を引をろして打わり火に焼てすねをあふり如此  
 のあふれ者とも提婆か悪にも超たり我か高祖大葬の禪天と仰られ  
 しも至極あり御内儀様かならず御用心被成候て禪坊主の來るとき

佛を隠したまへ罰の却て手前へわたる物やといへり二休日いや罰の  
 あたるほどのとにさるも佛のものとより常住不滅法界の妙体おれり  
 少しもさへかす灰の中よりをとり出頭の欠を拾ひ集めて与給ふとこ  
 ろへ神通第一の目蓮尊者早く見付てはやふさの如く飛來り佛と肩に  
 引かけて靈山へ送歸り阿難迦葉に申付淨瑠璃世界へ時付の飛脚を立  
 薬師如来を呼よせ給ふに薬師如来大に驚き早追に來り給ふ故に藥  
 箱も間にあわす懐中したる阿迦陀圓といふ妙樂を月ひて三七日に平  
 愈したまふ釋尊をほしめすやう是只事に非す世間の坊主とも我か方  
 便の糟に酔あらぬたはとつくのみあらずうそにうりをとり付て佛  
 説ありといひ弘むるゆへにこそかゝるめにもあたれとかく物をい  
 へは六ヶ鋪いはぬがましとをほしめし涅槃經の終りに一字不説と  
 いひ捨く扱提河の邊りに往生の素懷を遂給ふ人のいしらぬために

とて我が塚をの牛糞を以築籠よと仰られそれよりふた、ひ出給はず  
 いま各の尊ひ給ふ佛の乾屎橛とて干糞のかたまりなりまことの佛に  
 はあらざり亭主の信仰し給ふ阿彌陀如來の十劫以前に正覺をとり何  
 はしひとをもをばす安養淨土にぬやとして居給ふところを菩提  
 如來に頼まれてさらの極重惡人を引承せむとて十萬億の西方よりは  
 るく遠く出給への善導法然か徒大がねをた、さ立をいたくとい  
 ふそわめく母とに衆入ばなをた、さおこされ是は何事をいふやらん  
 ととぼくして居給ふところを善の繩と名をつけた佛のてをしり  
 からけ四人のことく方々へ引はりさまくの贅物をく、りつけ大小  
 用に立こともあらず阿彌陀如來めいとくしてこれ何の因果にて科  
 もせぬにかくひとさめにのあふことそや身かありたこそ人を救ふ衆  
 生のうぬかましとて紫雲も蓮臺もひつからげ兜卒の内院へ逃こみ罪

としめて内よりまんざすをかひて是もふたたひ出給とす靈山も極樂  
 もいまのま、むじなの栖とある是に因る各の愚痴我慢に唱へ給ふ  
 念佛や題目と佛の耳へのいらせして牛頭馬頭の鬼とも琴三昧線より  
 おもしろくおもひ火の車を引かけ念佛や題目を木やりにあまとか絆  
 太鼓にてはやし立て阿鼻等活の地獄へゆく事矢よりもはやしあきら  
 そ油断し給ふあといひければみあきされてそ居たりけり

儒佛一致別談并氣隨我任

新左衛門曰いま説給ふところの辭のかとりたるまてにそ釋新六か平  
 生談するところの儒教の心法に同して我が聞るところに異なり何を佛  
 法に奇特を語り給ひざるや二休曰佛法も奇特あり儒佛教異なりと  
 いへとも我心体を認知り其變化妙用と見る此外聖人も悟ふとあく佛  
 む説へさまとあし問然らば儒佛の一致に侍る乎曰一あるところも

あり異あるところあり出家には其異あるところを語り在家の人に  
 はその同トキ所を語るこれ佛法の廣大あるところありいま船人に木  
 へ上る事を語りやま人は船をさすことを語り合点すへきや聞く者  
 益あり語る者聞者等ざる乃み六祖の曰く道別見道終身不見道出  
 在家士農工商皆已か作業のうちありをのれか作業を断る別に道  
 といふものを求めの身を終るまで道を見るよし何をか道と云我  
 か法性の流行してふさがる事なく滞るよし私念妄想のために心  
 体た累はすとなく出家在家業賣辻番にありとも其あふ所に安むし此  
 心無碍自在ある是を道といふ境界には出家在家士農工商富貴賤苦  
 樂得牛馬逆經種種々變化して定まることなし是を諸行無常といふ佛  
 といへとも無常ありあつての牛滅の相をまぬかれ給はせしかれとも心  
 体におるりの増こともなく減するもなく是を不生不滅といふ心体

の主備には天師といひ佛家よは法性といひ我が宗には本来の面目と  
 もいふ名の替りたるまでありこれ其一あるところなり吾か宗の止啼  
 の黄葉を信せせ佛心印を傳へて見性成道此外の知ることもなく語る  
 事もなし是即吾が宗の奇特なり此外何の奇特をか説む儒家よは五等  
 の人倫を立て君の上に尊く臣の下に卑し上下分有て身を修め家を  
 へ禮樂刑政を以て國大下と治む佛家よは上下分りなく廣く下賤に交  
 りて人の善心を勸め惡心を退るを以て進退す人々善に進むて惡をやめ  
 ば貪ることもなく嗔ることもなく怨ることもなく争ふこともなく天  
 下治めずして治まるべし故に佛法には禮樂刑政を不用文をつらぬす  
 武を事とせず自然に化を布是其異なるところ也然とも佛法も人倫  
 を亂り國法を妨ぐる乃教のあらす禮樂刑政の其國乃風俗に任す只  
 出家の濟度の役人なり廣く衆に父らばれば化と布ことわればす故に



五等の人倫を辭れて髪を斷乞食明陀の行をなして愛賣は番火のま  
 り馬かた船頭穢多爾師のさらひあく親しくありて其善心を勧め惡心  
 を退くが出家の作業なりこれ天竺釋迦の遺法なり故に出家の佛の使  
 番なり釋迦既に世を逝給ふ故にいまの出家のまづ自性を悟り無我無  
 欲の佛壇を建立し心体本覺の如來を安置して御意の趣を直に承りと  
 くと合点して其上にて口上を申弘むべきことなり然らざれば口上の  
 主意を取違へ却て人を迷ひするのみ自性乃佛と對面せずして三千年  
 以前乃方便乃口上書はかりを以て何乃譯めしらす佛乃使を勸る者  
 輿州へ乃口上書を京大坂へ持參し九州西國へ乃口上書を關東へ持參  
 し武家への入家の口上書と申渡し公家への町人百姓の口上書を申渡  
 することし故に在家の人になぎをかくなどせうをそくふな過去よ  
 く鼠の穴をふさたたる報ひよて一牛苦勞したる人もあり蛙を殺した

る因果よく非業に死をしたる者をあり魚鳥を買く放せば功德なる  
 ひかし漁者のとりたる魚を買く放したれの後富貴又成し者あり佛  
 像を刻めぬ死ぬるときは迎ふ御出被成路の端又石地蔵を立せぬ六道  
 の辻に極樂へ乃手引を被成國國家又禍する火付盜賊を見付たら  
 ぬそのとにかしてやれ執へて殺せは身に報ふな是皆出家のいまし  
 めにして在家の人よめすところにあらず在家乃人よは只惡心をも  
 つな主人や親方乃心よりむく兄弟親族をむつましくせよまづつを  
 いふ人よあらそふか人の害なることをするあいふな我慢心をお  
 こそき氣隨我ま、をそるか人をわるくいふな欲をかこくあうそをつ  
 くか下々の博奕をうけあ盜をそるあをのれくか家業をよくつとめ  
 る人比物を貪らぬやうよせよ我か勝手によきと人のためよあしき  
 事をすあよめをにくむなまうとめには孝行にせよ妻の夫の心にく

むくな現世に悪心をこめて、來世には惡趣に墮するな今生よく愚痴  
 を起せば死して六道に迷ふなどをしへく人の善心を導くおとをりせ  
 ずして出家の戒律を在家に人よそ、め夫にかくれまうとめといさの  
 ひ親にまからせてを寺へ参るの功德になるそ惡心おからを念佛をさ  
 へ申せば佛よなるぞ廻向の場千部万部此場をふめバ作りし罪を消て  
 なくあるぞやらぬ者の地獄へ落るぞをしゆるゆへに歴々此妻子か  
 雜人の大勢こみあふ中へ押わけるといふみたをされ衣類を引さか  
 色狼籍者よあふと髪を引はどかき下女つきくの者をどこへかをし  
 へだて寝むあさましきありよと夫よ耻をか、せ下々の主人を見失ひ  
 りこ爰どうろたえわりく是等の害の皆自性の佛よ對面せせ欲心佛を  
 本尊よ立て教るゆへなり儒書など少し讀たる者此等此ありさほを見  
 てわれ見たまへ異端のをしある世に害有あせ如此おとケ條よあまう

そして聖の、あるを尤あり是佛法の罪よはあらせ佛大よめいとくなり  
 達磨大師の人を迷えす惡智識のうち殺してを罪よあらぬと宣ひし况  
 や在家の人と國法あり作業あり鳥獸の民の田畠をそこあふをの也こ  
 れを殺すこと殺禁せばせつらく人乃作る物を鳥獸よふるまふて百姓  
 の何を以る年貢を納めむ家業を廢し年貢よほまりせ何あさのあまり  
 に惡事を巧み人の物をだましとるか盜をそるより外のみとあし如此  
 若く鳥獸を助佛を作里坊主を馳走したれとど何の功德よ成べきや  
 若是を以佛に教なりといは、釋迦といふいたづら者なり在家の人  
 々出家の戒律をす、むるの樵夫に木をきるな氷をおよげといふかど  
 とし貴方の五等乃人倫なりかるがゆへよ只人倫の作業をほとめ念  
 頭の愚痴を拂ひ去り妄想の佛をおくり出し自性本來佛に對面する  
 よとをまめそのみ此佛よ對面するときは今日の心体正して邪なし然

其は生々を死々もあしきところへへ行べからず盡心正しけれの夢  
 も悪事をなす事を見ぬものなりこれよく生死の事も合点せらる  
 處し出家の戒律の貴方此作業にあら奇特を求るのまよひの心な  
 り自性を悟りて無我無欲の心体にかへるときに聖人も悪まれ佛  
 もあふても御機嫌なり神も守り給ふべし是現世安穩後生善所の道な  
 りまた出家にしめすの寂滅無爲の心体にかへり乾坤を踏やぶつて  
 三十三天をどびてへ梵天帝釋を目の下に見をろし是非眞妄どもにわ  
 すれて心太虚のこどく釋迦達広をも丸呑にせることを悟はべし出家  
 よしめすに人倫の事を論じ弓を射よ馬を乗れといはは可ならんや今  
 俗人の禪を學ぶ者を見ゆに一向に自性開悟の所へはこゝろもつかせ  
 祖師の法門を一二句覺へ我か氣を入たる釋迦達広を呼入氣のつま  
 る釋迦達広をば追出してよせつけせ只禪を以氣隨乃かくれ家とする

此み是俗人はかりよるあらせ出家よる此類あり何も去らずに大口バ  
 かりた、けども禪家此風如斯のなりとねり人をゆるすと見えた  
 聖達廣大にめいどくなり活達自在と氣隨我かま、とほされやすさを  
 のなり必そ取違へ給ふな氣隨の情の向ふ所を是としてみづら其非  
 を不省者也情弱の自其非を知るといへば情の向所にひかれく自制  
 する事不能者なり氣隨にはうあら我慢の後見あり氣隨を以て物よ  
 ましめる是を我かま、といふ百惡乃根元なり下に居る者の物と争て  
 忽も身をほろばし上居る者の私の意地を立人こそこなふ時の勢  
 を以する故に一旦の人畏れ隨ふといへば勢盡る時人情離を反す  
 終に家を滅す可慎の甚しきなり活達自在成者の情のためひかる  
 、あどあく理の究りなき事を知るゆへに我慢人のれを立るあとな  
 し善に隨ふと滞なき事水の流る、かあとし貞譽日立ひとつに成る日

亭主夫婦の三寶を信し念佛題目の行者なり御坊の出家也去かるる儒  
 教我説と法談を妨げ信者我迷のし給ふの何事や二休曰我儒教を説  
 るあらしまして信者我迷ははににあらせ亭主夫婦の信仰し給ふはや  
 け物の佛法我やきな我してあてがふ也我の未生以前よかへりて釋迦  
 にも孔子にも老子莊子にも違ふて其同しきところ我悟るなり人々今  
 日此心には持領の我慢と聞ところの執滞有りて種々此妄心おこるも  
 のなり未生以前には儒者もなく佛者もなし只眞實此法性のみなり其  
 靈覺に極く見るところには儒佛の小異ありといへともいつれへこけ  
 ても心体我さへ取失は終の無欲無我にして此心無碍自在なり各も未  
 生以前にかへりて修行し給ふ、法華も淨土もりれなるに小糠佛に成  
 とも成たまひてはかみあひのあるまじさりなから欲と我慢とこの二  
 つは物海川の隔と成る未生以前にはかへらぬものなり是を生死の苦

海と云かならず死ぬ時此事にはあらせ能心得給へ此苦海を渡ぬ内  
 の四書六經我講する者も孔子は徒よあらし念佛題目座禪讀經に腹を  
 危らする者も釋迦の徒にあらせ人我勤めとも少し目のあきたる者の  
 たまされぬものなり

あやほり此起り

二僧曰御坊の只むた口のかりとほえ口た、さ給ふ惣しと禪家の大口  
 のいまにはしめぬ事なり二休曰御坊達の無用の用我知給のす居とこ  
 ろの二尺四方寢所の疊一帖の外は無用の地なり然とも無用の地なけ  
 れのたらせ狂言綺語も一つの方便なり釋迦もいりほがむたぐちをた  
 らさ給ふむた言ましりに語らねは人比耳に入かたし御坊達の談議も  
 其通りなり上瑠璃あやつり狂言といふものも本の教の方便なり故よ  
 太平記平家物語義經記其外古來の記録の内にて義理は正しきところ



孝子忠臣の君父のために其道を盡したるところを拔出し公平杯いふ  
 きりひやつをこしらへて活達に鋭氣を養ひ太平に時にも武士の子供  
 には軍といふ形をしらしめ上るりに作あやつりに仕組狂言我ましへ  
 と人の面白がるやうに作りかけ義理の心我導さ不義無道なるもの  
 一旦利を得る終は滅ること我えらまむケ様のことにて下々迄其  
 邪心我去り善心我開しめむためをしへなり我等の若き時迄の綱公  
 時辨慶など名乗るかりりめ軍のまねをして遊ひしなり五月の節句  
 にのぼりを立鎗長刀をならへ子どもの弄にせしむ太平の時武を忘れ  
 さるのをしへなり三月の離遊ひも女の内を治むる者なれの幼少より  
 世帯道具の形とししめ下々には上つかたの儀則を知しめんためな  
 り皆をしへにあらまといふことなしいまの談議もあやつりも昔しの  
 風に替りて其實をとり失ひをしへにはならまして却てじやまになる

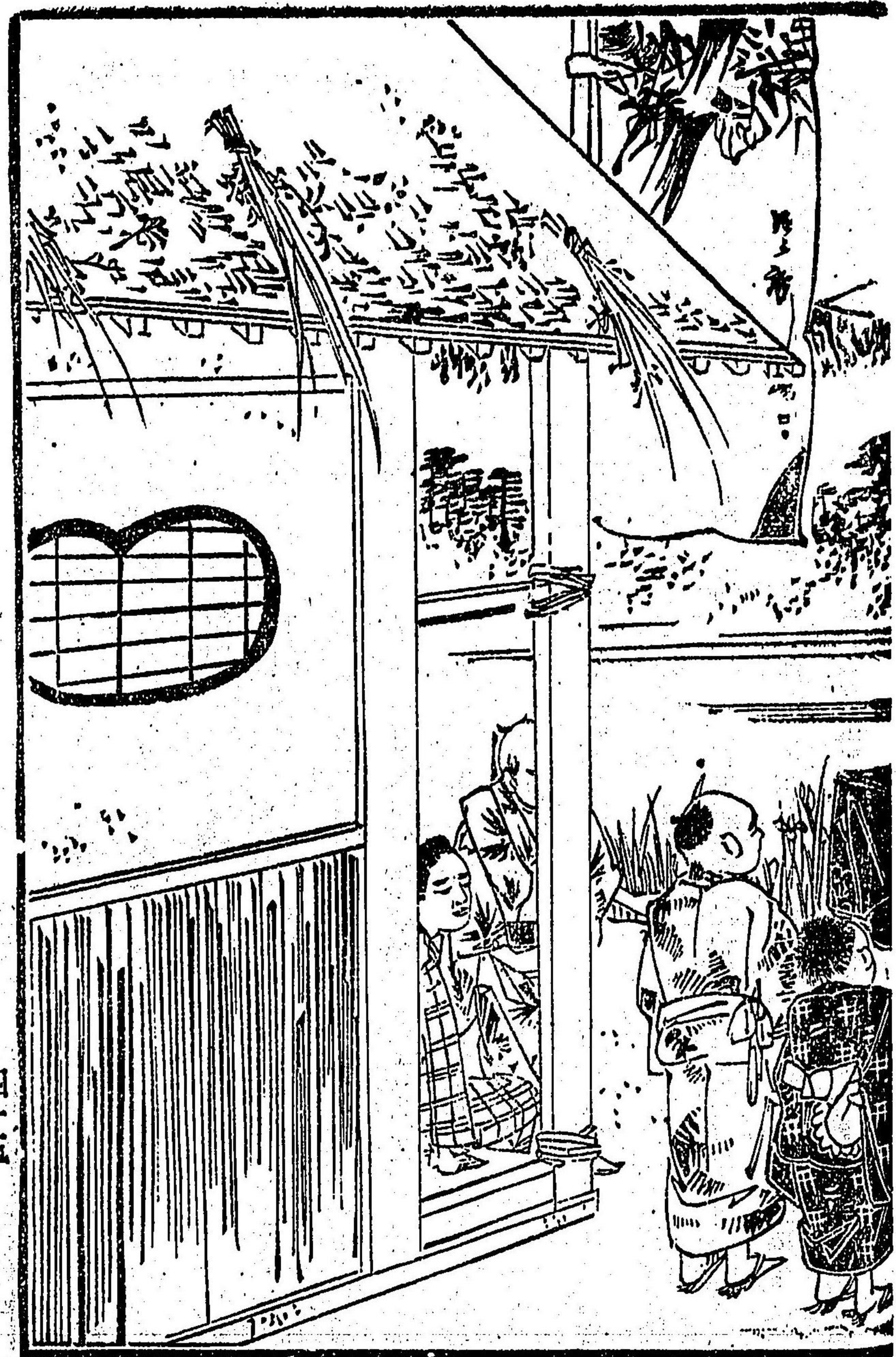
ことをはし念佛も題目も其實の信をおこして我か自性の佛を呼醒  
 としへなり我宗に祖師にも毎に主人翁くと呼びてみつかふ諸と答  
 し人あり念佛もこの道理なり主人翁禪家に我か本心を指して云即本  
 來の面目なり然まのかくはことくいひさかせその愚昧の人合点せぬ  
 どころある故に各の談議もむた口ましりよ説て人におもしるからず  
 其内百人に一人も信我をこしと善にそ、めの大成利益なり近き比神  
 道者と名乗社人のはてと見え我等の近在に來り縁を少し讀てりの  
 あとに百姓の身持人情の變化親族朋友の交り下人の使ひやりま神  
 道に引かけて其情をよくいひとり如此なれの神の御心にもかなひ常  
 に守り給ふ神明の邪とけがらひしと嫌給ふもへに邪欲の心にその  
 いかちと祈りてもかへり見給ひま至極口あひにてむたことましり  
 に説ともいふところひとつとしてあしき事なく欲かましきこともな

し故に村里の野人感化して穢のやうなるをらるひす邪心やはらさたる者をはし弟子に成て傳授を受度といふものわれの只正直にして邪心をさることを語るところの代官名主等迄喜ぶこと限なしとしき事には學問もなく平生の身持凡人なり彼等實にして行粧正しく人の信むいよく篤かるべしいまの談論もせめて彼神道者ほどの益あらぬ人も悔るべからず功德も大成べし人皆佛性をうなへたる者なれば善も感化せずといふこときはをしへやうめしく手前の欲を先立るときは人信せることなし人も亦靈明あり

自性之間

問儒者の自性を悟ると佛者の自性を悟ると異なることありや曰自性もど二つなし見るところは些の異なり先儒者の道を以語ら天地の間の陰陽の變化のみ陰陽變化しく万物を生ぜ其土を太極といふ色もな

く形もなく聲もなく臭もあし始も終もなし法象にわたらせして法象是より出づ莊子のこれを大宗師といひ老子のこれ我玄牝といふ儒にはこれを天といひ其流行を命といふ天のもど積氣にして造化の舎なり其舎と借りて其主は名付人の主人を殿といふがことし殿といふ屋形の名なり然らば天の道体の稱号と知るし總く皆形あるものを借りて形なきもの、名とす名になづむべからせ故に老子も名の名とするさの常は名よあらずといへり道と陰陽にわたらせしてまた陰陽を不離此造化の主直に我が心体は具はるこれを性といふ自性は妙用變化流行して喜怒哀樂は情其大本失はざるこれを道といふ故に子思中庸に於て率性之謂道といへり自性の靈明これを知といふ是非邪正明か又照して一毫の私なきものなり知覺の發動して分別にわたる是と意識といふ心体もと善悪なし此意識好悪の情に交りて善悪邪正種々



茶  
屋  
の  
内

の變化をなすのみ其善に傾ひて自性と不離を本心ともいひ良心とも  
 いふ好悪の情にひかれて本体を離れ意識専事を用ひて只己を利する  
 に巧なる是を私知ともいひ小知ともいふ小知情欲を助け思惟する  
 これを妄心といふ此妄心變化して終に邪をなし惡に陥るのみ佛家よ  
 且陰陽にか、ばらき天地万物比大本吾心体に具つて無始以來不生不  
 滅なるもの是を法性とも眞如とも我か宗には本來比面目ともいふな  
 り有無にわたらき聲色をなさき其靈明十方世界を照す者は是を本覺と  
 いふ其妙用實相圓滿にして大千沙界遺すことなく須彌山を丸のみに  
 しても喉にさはる事なきところを見て内又徹して疑ふおとなき是を  
 見性といふとか宗の他宗と違ひ階級を不立直に如來藏へ飛こむ工夫  
 なり只好悪の情動くろの縁にひかき意識比分別迷妄して三毒又和し  
 さましく比地獄を作りみつから此又墮在して生死の苦海に沉淪する

是を六道輪廻と云其微妙のところの言既乃盡すところにあらきとつ  
 かに言説よわたれの第二義にをつ向れも聖人比道なり儒なりとも佛  
 なりとも勝手次第に學ぶとかく自性を悟り給へ自性とさへ悟れば儒  
 といひ佛といふ名もなくなり世界の我が世界にかり丸裸よといばら  
 からたちの中に晝幾をして我に障ものなく人喰犬もかみつくことな  
 しとかく生死禍福の間も迷ふゆへに人を誑かし人も誑かされて心  
 体を悟ることもならきみつから苦しむのみ只父母未生以前にかへり  
 て工夫し給へ生死と云も好悪の情なり大かたのことよきは此關の超  
 越ぬものなりこの關をさへ通れぬ跡の咎むる者もなきものなり不  
 成と、く中たかひするの勇比足ざる也佛法も儒道も情弱にての修  
 行のあらぬおとなり我か心体を知らざらん人と生れたる益なし問儒  
 佛とも聖人比道也と承る然らぬ儒佛並び修して害なからん乎曰儒

佛どもに聖人の道なりといふのいまた道を不知者のためも語る一通りの詞なり道の我が心体の妙用として直に我が道なり聖人に假こともなく佛も暇るおともなし我宗には此心体を主人翁といふ道の是より出の外に求むるところなし子思中庸にとるも率性之謂道といひて堯舜孔子に假るおとをいはせ釋迦孔子の其奉行なり釋迦孔子の道にはあらず天道より暫く先達に命せられたる者也伊尹も亦曰吾の天民之先覺なる者也然らの先達の教導は任せ西へなりとも東へなるとも入よき門より入給ふべし釋迦孔子の再拜圖を以導くものなりそれにも猶うろつくやつをの我宗の達磨備家は莊子おといふもの出く杖棒を以た、さ立と追やるものなり釋迦孔子もをりくの杖棒を用ひ居る、こともあり是も亦奉行の役ありをろそかにをるひ給ふべからせ然とも我宗の地獄の上の一足飛なり飛そこなるは魔

界に入るなり用心し給ふを故に初學の士又幼童の人のまつ孔子の下奉行に隨て賢々に修行したるかよく其上よき心頭に疑ひ起るおと有へし此に至る工夫の入るおと也疑のをこらぬ内の孔子も釋迦達磨も直談の成ぬおとなり奉行衆よさへ直談するおとなれの見解と云もの立おとなり見解立て後自性の主人翁と親しく對面するし今の然らす佛者の法に段を立と孔子を佛の支配にこしらへて佛法の廣大とし儒者の佛をりしると以て務めとそ道を釋迦孔子にあつけをのきか道なることをまらせ

一念彌陀佛即滅無量罪之法門

新左衛門曰然らの一念彌陀佛即滅無量罪と申おとは佛比妄語も候哉二休曰佛に妄語をし貴方の一念彌陀佛といふ所をいかい心得給るやあみだの十万億土の遠方よ在とおもひ給ふ歟若左様おところに

居給ひ、念佛に鉄炮を交せし申たまはとを届くおとあるへからせ吾人  
 乃胸の間に自性本來の彌陀如來光を放つて立給ふ其道場は無欲無  
 我乃心地よしして一点の塵なく其廣き事天地万物を入きてを法かえさ  
 てるまどおし八功德池の水清々として目のをよふところ金銀乃砂も  
 あらずといふおとあし惟心乃淨土已身の彌陀と云これなり然るは各  
 の遠近西方の彌陀を信し妄想乃念佛を頼みよしして自性己身乃彌陀を  
 の貪欲の泥を以て息をならぬほどに目口をぬりふさだ愚痴の袋をか  
 ぶせし彼の光明を妨ぎ八功德池の邊は妄想瞋意乃荆棘をうへて虎  
 狼を養ひ置惡魚毒蛇の地中よしひれをふるふ極樂乃當体直は餓鬼畜生  
 の栖どあり鬼を此に活計し種々乃くるしひを受る事障あり是を元  
 來地獄あり衆生みのら地獄を作す此は墮在すといふ一念信をおま  
 して内よりへり見まゝろを認る自性己身の彌陀と見付深くこれと尋

ひ彼の貪欲乃泥をあらひおとし愚痴の袋をやぶり捨るときは彌陀如  
 來自由を得る彼の光明をかかげ智恵の利劍を提す勇猛の力をふるつ  
 と妄想瞋意の荆棘を断拂ひ給へん虎狼形を隠すへさところなく鬼畜  
 の劍の光よりおそれてまたもなく過去地獄の當体直にもとの極樂  
 淨土となるこれを一念彌陀佛即滅無量罪とは申なりたいうかくと  
 西に向ひなまいたくと云ばかりにその息を切し痰を生るのみに  
 して阿彌陀如來合点し給ひて釋迦如來の方便に我ら無欲無我乃心  
 体をあみだ佛とは名付給ふ眞如といひ法性といひ我ら宗に本來乃面  
 目と云も皆おかしものなり一念と云ふと只かりそめ乃まどと思ひ給  
 ふべからせ一の專一乃儀にまもつらと訓念々此に在る不忘の謂  
 なりとづかに怠るときは如來忽逝たおふ儒者も佛者も怠るまどおく  
 常に心を不用しての道は成就せべからせ吾人本心乃如來たまくと顔

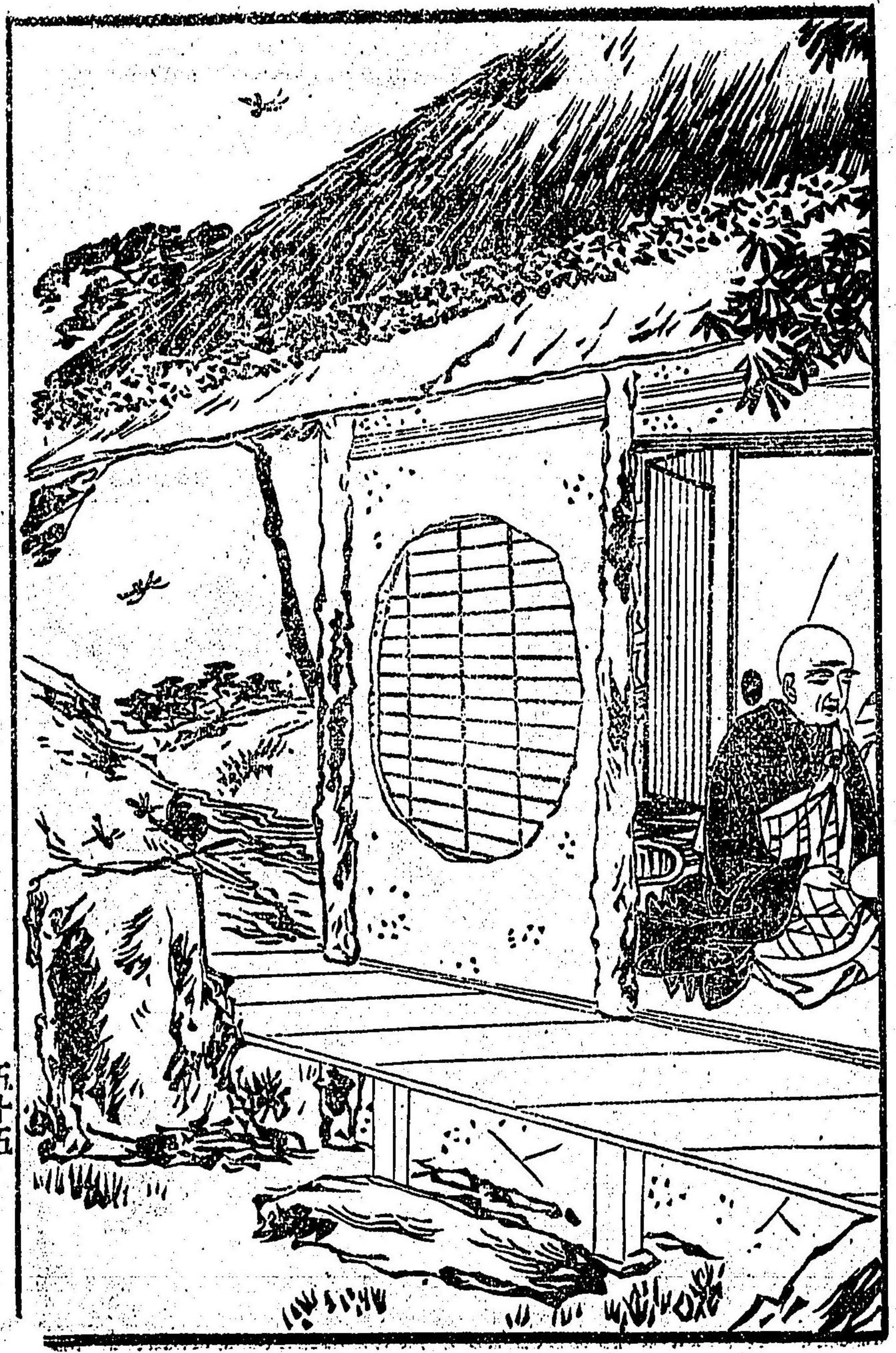
を出し給ふまどあれども御嫌物乃三毒を以鼻の先へをし付る由へに  
如來顔をまめめて送給ふ必油斷し給ふ各乃念佛に之の罪業消滅思  
ひもよらぬまどなり

見性成佛

それ佛法の心法なり直に自性を悟る此心の自在を得るを要とす此外  
更に求るところなし既又自性を悟るときは六趣四生を目乃下に見お  
ろし直に三十三天を打越釋迦阿彌陀も對面するし觀音勢至をも友  
とす至る所即花ふり音樂聞へ生もなく死もなく是非眞妄乃心頭  
に横たえるおどなく天地と丸香にしても喉に流るまどなし火に入  
ても不燒水に入ても溺る、となし是を見性成佛といふ實に成かたき  
事にあらま只三毒乃妄想を拂去て本來固有乃心体に之へ歸乃み微塵  
ばかりも外より求るおど有に非ず是を以て佛乃をしへの物もいらす

才覺をも勞せま只生きたるは、の我よかへるまどなりといへ之置  
たる物をとるやうにやすきおまどくなれども彼三毒の妄想心頭ま  
ど入り居て牛頭馬頭の鬼となり方寸乃内に八大地獄を造立し色々  
すはぬを替八百八色に身を變して餓鬼畜生修羅刀山叫喚燒熱等乃種  
々乃所を經廻歩日夜に我を呵責するおど隙なしこの所をよく合点し  
て勤る三毒乃惡鬼を退ぎたまへ三毒の惡鬼退るの見性乃門入まど  
やすかるべし是を漸修の工夫といふ然ども志怠りて叶べあらま源  
乃義家奥州責乃おど十死一生の軍よあらまむむ彼惡鬼ども退くべ  
からま道の近きまあり遠きに求むべからまど儒教にもみゑたり自性  
乃外ま道有といと外道なり俗學なり佛法にもあらま儒道にもあら  
ま

悟





問何を悟といふ答曰悟とは夢乃悟たるなり覺と云むおなじ此心二  
つあるにはあらず夢中にはうきしきあり悲しきありありおそ  
しきありあり苦しき事あり皆常にをゆふところ此妄想魄にといより  
心中に流轉して此夢となす夢中には是を實事とれむひ或の喜び或の  
怒り或の恐を或のくほしむ悟く後眼を開き見れぬいま、で有し苦樂  
得失此境界去て迹を初めて是夢にして實事にあらざるまをを知て  
みつから笑ふ凡人乃境界渾て夢に似たり吾の愚痴の情欲妄想種々に  
轉化し其妄心の内にて苦樂得失の境界をなし喜怒哀樂乃客かくるく  
來てぬし乃位を奪ひ本心乃主の有りなきごとく夢中境界に  
何を異あらん一旦工夫内は徹して本心の主に對面するときの自性本  
覺の眼開き四方明らかになて今迄意圖情欲を以て建立したる苦樂得  
失の境界一時に滅じて迹をなし是を悟といふ

惡心情欲

問人々佛性を具て生したるものあり然るも惡心乃者ればさ何ぞや  
曰人心もと惡あし惡の欲心の根より生る常に自心に試み知給へ欲薄  
き者の惡疾なすおとなし只欲乃動く所情乃ひく所をよく慎たはへ欲  
の金銀貨財乃欲乃みにあらず色欲名欲出家の法欲一切乃見るまを聞  
こと情の動く所の皆欲あり慎わづかに怠る時の情動さ欲にひかれて  
覺えず惡は陷不義無慈悲の心もれこるものなりをのれに怨有者の死  
するを聞て悦の勿論のまとなりわれに怨なしといへとも彼死して己  
に益ある者の死を聞時口にはいはねとも覺へて悦はしきま、ろあ  
り假初なから不義無道の心にして小人の常の情あり心を付て慎へさ  
ことなり甚しき者のをのれに利あることには人の害あるをまかへり  
見す慈悲のこ、ろの欲の妨なるもへに念頭にささすこともなし是

より日々自性本体の靈覺をふさぎ種々の巧を用て万惡に至らざといふことなし儒佛の學者油斷すまじき物の情欲の私也欲の身方のやうにてつまる所の敵になるものなり年中欲の爲よ身をくるしめ罪に陥り家を滅すものいくろをくろや考へ見給ふへし

新左衛門曰仰承り候ぬ然とも欲は人の情にて自然の物あり喜怒哀樂も欲にもどづく物にて候得ば形ある者欲なきもの候にせ此欲を以身を養ひ妻子親族をはこくみ候得ば此欲を斷候て枯木のごとく罷成死ぬるをを生るをも知ぬにて候べし是の人の成難き事と存候答曰能不審にて候飢ての食を欲し寒しての衣を欲し父兄を愛し妻子親族をわはれむの自然の情にして生あるものなくて不叶欲なり五等の人倫に居る者に此欲を斷絶せよといふに非ず只法性の靈覺を受けて心体の自然に隨ひをのれか分をはかり有る物を以用求て人の害に

ならず心の累にむらぬ物を求め家業をつとめて不飢寒からぬやうに立まゐるの自然の欲なり私にはあらずをのれか分を知て道理のまゝに身を養ひ妻子親族をはこくむの人倫に居るの道なり親の好む物とて人の物を奪ひ或のたまして取親と興るを孝と云べけんやまして人をたましすかして人の物を取身の用をみすの勿論親類舊知に興るの私の至極なり士農工商共にをのせか作業を第一に勤其力を以人を養ひ人をわはれみ其上に餘慶あらん分又應したる樂もなくても不叶事也只已の作業ををろろかにして分外の欲をかわく故に見る物聞物はしくなり他を食り人のもたぬ物を持ちたりとてうれしがり情欲の動くところ限りなければ生涯欲につかはせ是より種々轉化してをのれをろこなひ人を傷の惡に至のみ色欲の最其重きものなり生死の身の本也生ある者誰か生を好み死を惡まざる者あらんや然るに欲乃爲色



のためよの生死を不願者多し是よく死を輕むするにはあらず欲のひ  
くところ重死が故よ情乃動くに任せて死を忘る、も乃あり利欲色欲  
は尤情のひくところ甚しきものあり輕きことを以いは、其を好む者  
常に世用を輕むするに之をらま基にうちか、りたるときひ身に火の  
付をも覺へざるがごとし是を以情のひくところ心乃好む所には其他  
を忘る、ことを知べし彼死を不願者も情乃動なきときひかたのこと  
く生を慎むのみ

三世の辨

問佛家には三世を立儒者の三世乃説をやぶり此所大に異なり答曰流  
儀々々乃教あり然とも昨日あれの今日あり明日あり三世あしといふ  
べかろそ佛家よ三世を語るといへとも悟るときひ三世なき乃みにあ  
らす寂滅に歸して一世もあし儒者三世乃説をやぶれとも迷ふときひ

三世に流轉することをまぬかれを既自性を悟るときひ過し事に心を  
不住將來を迎へて好惡をなさ心太虚乃ことく空闊にして迫ること  
あし物の物よ任せ來るに隨て應して迹なし是佛者といへとも悟ると  
さひ過去もあく未來もなく現世に在りて心を累はすことあし心迷ふ  
ときひ歸らぬことを追思て忘る、ことあく將來を迎へて好惡驚懼の  
情を動かし現在乃心執滞して喜怒哀樂乃ために役せられ是によつて  
自性乃靈覺を塞くときひ儒書を讀者といへとも三世に流轉し六道に  
さまよふ儒者佛者同しく人あり心何ろ二つあらん教の其國乃人情に  
因て立たる者也教乃言に執する時の種々乃異あり自性を悟る時の佛  
者もあく儒者もあく佛もあく衆生もあく只儒佛共に自性を不悟とき  
の三毒に責らる、乃凡人あり楊龜山か曰人性乃うへには一物を添べ  
からず堯舜万世乃法たる所以の者の只是率性のみ龜山の程子門下の

高弟あり儒者といへ共自性の外に道を不可求事此一言を以著し貴方の只再生の言と以三世を論ず佛者といへとも未生以前の事の蛙やらひ猫哉覽知べからそ未來の事の佛説有といへとも何に成やらん誰も見て來るも乃あま万安和尚のいわれしとく死ぬれの豆腐こんにやくなるのみ今日既に自性を悟らぬ寂滅に歸して何ぞ未來の恐れあらん天堂をも好まず地獄をもいとはずあふところにあむるのみ馬とありたらん荷を負べし牛と成たらん車をひくべし鶏と成たらん時と告へし何の因擇することかあらん達戸曰迷て佛を信し天堂の快樂を願ふ者の猶いまた貧界をまぬかれすといへり一切の迷の皆愚痴といふ心まつくらにして其暗きことをしらすを乃れにも決せせ人にもしたかはず疑多して心定まらせ彼を思ひ此を恐れ事を危ぶむて思慮多端なりかへらぬ事を悔悲しみたをしことを繰返し思つて忘る、

ことあたのせならぬ事を毛強て作んと思ひ情乃向ふところを捨ることあたのせ万一を恃て心くるしめ人を怨み身をかこちあらぬ事を迎へて心を驚かしをのれか好む所に人の従ひむことをれもひ我が隠してすることば人知まじと思ひ是等の事を以常に心忙しく暫時も安きことなし故に死後迄もなく今より三惡道にねちて無量功が間苦を受るのみ貪嗔痴の三毒も愚痴を親とす貪欲嗔恚の勤めて制すへし愚痴の一病のれさへてもさかせ一旦自得したる事も又さしかへす者なり故に愚痴ある者の貪欲嗔恚をも制すること不能者也是を以聖賢の教佛の説法皆此愚痴を去る乃手段のみ取分天竺の人情愚痴ある國故に其教多端なり經説の愚痴成ことを論して其愚痴を抜乃教あり小兒を教るには小兒の情を以教されの聞入ざるがごとし黃藥禪師の曰如來一切の諸説の皆化人也黃葉を金ありとして小兒の啼を止るかど

としといへり只心体を認知る時の三毒乃妄想なくなりて夢のさめたるがごとくなる是を悟りといふ吾か宗の上機ものを教る此術なり故に經論にか、はらず直指人心見性成佛の旨を示す我宗を學ぶ者見性を不務して徒に祖師此迹を學ぶ時の虎を描て犬に類するの害ありへし只禪のみに非ず一切の事其意に通せきして迹を以學ぶ時の皆害あり故に學術の自然を貴ふと儒書も見ふたり

因果業報之辨

何をが因果といふ曰此因われ此果有因の果の始めなり果の因の成就なり譬惡事を見惡事を聞に因て此念動て終に此惡事をなす其惡事を見其惡事を聞に因なり縁なり此念增長して此事を果すの果なり何をか過去の宿業といふ昔日惡事をなし其惡に因て今日の心苦む是を過去の宿業といふ此業われ此報あり故に易にも積善之家必有余慶

積不善之家必有余殃といへり惡の因あけれの惡乃果あし昔日の惡事あけれの今日の宿業あしかあらずしも死後の事にはあらず眼前の事を以生死に通じて知り一心体の妙用を以天地に通じて知り給ふへし臨終の一念といふも必ず死ぬるときこの事計はあらず今迄の非を知て惡を改め善に注時の事なり今迄妄想の心あてうかくと暮したるを今日の本心にあらざることを知て悔改め心を新として誠の道に越く時の今迄の妄想の消て跡あし何の宿業をかひかむ是今迄の妄想の心の死して此心新に善所に生る、也此を僧俗男女も不限此身此心ながら直に極樂へ往生するとの云なり惡の心も變ずれ直に善となる此心二つあるにはあらず此に至て此真心を失ふことなく不忘不怠工夫せば終に自性を悟て此心無碍自在成べし此を極樂に往生して四大劫の間蓮華の中に在て修行し終に悟を開くと云成べし佛の方便

には皆主意あり口は任せて説給ふにはあらせ故に學道人戒律を勤る者ハ惡の因縁を斷のみ物好し勞苦するよとあらせ問如何かして輪廻をまぬかれぬ日今日新に此所に生きたりとたれもふへし昨日迄の事の過去なり苦樂得失とも去て跡なく然るよかへらぬとをくよくと思ひ出して種々に心を累らすものハ昔日の所へ再び生れ替して我と宿業をひいて苦しむあり是を輪廻流轉といふ唯今日の新なる心を慎たまへ明日の事の知るへからせしれぬを今より迎へて心を累らす者ハいまより未來に迷ふる乃なり明日又生れ出たらハ其生たるところにて牛も成とも馬も成とも相應の作業有べし此生ハ一日々々の物あり水の流れて不住かごとし昨日の寒ハ今日の寒にあらせ明日の暑ハ今日暑からせかくいへはとて出家在家士農工商各それハの作業有何心とも不用行當に暮給へと云は非す今日の心新成ハ明日何の

宿業をかひらむ昨日の事の去て跡なし今日の苦樂得失よあづかる事ハ非ぞ縱昔日の事よて今日患難困苦に及ふ共今日新に出來たり患難困苦也昨日ハ昨日今日ハ今日と思ふへし心ハ物なけれハ輪廻もなく宿業をひく事もなし是愚痴なる者輪廻を去の服藥發散の活劑也用やう悪けれハ毒有兎角自性をさへ悟ればかやうの事ハ問にも問にも不及獨知らるゝものなり

念佛題目之主意

問然らハ念佛を申題目を唱るハ無益のことなるか曰無益の事といふにやあらせ愚昧にして道に可入力もなく欲心邪痴のみにして善に疎き者ハ佛といへとも可救やうなし無縁の衆生の度すべからせと云ハ是なり故に佛の方便を以直し其欲心を点して天堂の快樂を止めし其ハやがる所より地獄の苦しみを説く罪を恐るゝ事をあらしむ皆好悪





の情より導く者也諸の罪障の皆六根より入て心体に禍す故に鐘をふるきて耳の用を塞ぎ珠教を執しめて手の用を塞ぎ佛名を唱させて口の用を塞ぎ香を焼て邪きの穢を去り花を立て眼を清淨の所へ寫し佛像を立て此に心をうつし其相に因て善心を感じしむるのかりみと是外より來る邪を防て内の佛性を養ふ方便なり只是飯上の蠅を追がごとく當分の虫薬なりといへとも念々相續して止さるときは薰習していつとなく邪惡の心去り善心感發して内に快き事をおほゆべき是を極重惡人無他方便惟稱彌陀得生極樂といふなり愚人も念佛をさへ申さは極樂へ往といふにはあらざ保元平治の亂より天下の人情盡く暴惡邪知のみにして只欲心のみ先に立道と云名をだにもしらず禽獸の餌を争ふてかみあふかごとし黒谷の法然坊其比天台の學匠なりしが此人情を見て忍ひがたくおもひ逆も經論乃煎藥にて此病急に治さる

ことは叶難しと見切て勸經無量壽經阿彌陀經の三部を依經とし唐土の善導が一向專念の念佛稱名を勧めみつかから愚坊主と成て名を捨此外に奥深き事を存せは二尊の憐にもれ佛罰三寶あたりはつべしと一救起請を書我か申念佛も尼入道の念佛も少るかはる事おし必不可疑といふて彼の止薬を施し給ふ賊に殊勝の人なり暫くの人情頼もしくれもひて心と傾けれとを久しけれの薬性も薄くなりて利もすくなし法然死後になりての教やうたあしきやらんやたら念佛に成て念佛さへ申せば欲惡なから手間不入に佛にあるといふはどころわれ念佛を以て惡心のかうばりとして法然が志にもりひくゆへに鎌倉西明寺の時當つて日蓮といふ大器量者あり此有さまを見て此分にての佛法の破滅なり其上實相の体を離れ何もかも打捨て他力本願と号し寶藏比丘の彌陀一佛に打任せ其大本を失ふこと不可然さらの世上の目を

醒さんとして念佛無間と打ておとし大乗の法華經をか、け出し是釋尊  
 説納の御經あり日天子月天子三十番神其外の神も此御經の内にも  
 ますゆへは此經を授持するもれをは諸天善神も是を守護し給ふ現世  
 安隱後生善所の妙典此御經は不過法華以前に説給ふの爾前經として此  
 御經の足代なり故に無量諸經は四十余年未願眞實と説給ふ此御經を  
 さし置いて餘經を信する輩わ佛にも捨られ阿鼻地獄へ落べしと一命  
 を抛て勤めけれども佛在世にさへ俗人の耳に入難き廣大乃法華經を  
 れの授持する者なし日蓮熱願ていやくこれの時をしらぬ山伏なり  
 されの我等を丸薬よいたさうとして法花の題目に壽量品の内の自我傷  
 を一七加減して是万病を治する薬なりとて勤けまとも方こり違へお  
 なし虫薬なれの能毒さして替ることもなし弟子の六老僧より色々よ  
 わかれて法華一部を小劑よわけ上四巻と勝とし下四巻を劣れりとす

これを勝劣派の四巻法華といふ一部八巻勝劣なしといふこれを一致  
 の法華と云又壽量品一卷計と取て退くありこれ我富士派の一卷法華  
 といふ一宗の内にて又争然たこそ念佛題目に毒かし只用やうあしけ  
 れの却而我慢愚痴の餘病を引出只佛のをしへのことく善心とれこし  
 惡心をさへ止れいなよを用ても薬にありて毒よのならず儒者も佛者  
 も神道者も此所よれたるてのかはりなしよく心得給へ只貪嗔痴のみ毒  
 お去給ふか肝要あり此外に毒斷なし

六祖の行由并達磨の終

新左衛門曰達磨の事承り及びぬ六祖と申のいかなる人にて左様に  
 尊ひ給ふる二休曰是生知の人なり惠能とてもと新州嶺南と云片田舎  
 の百姓なり毎に柴を賣て母を養ふ二十四歳のとき行客の應無所住而  
 生其心といふ事を唱へて過ると聞て直に内に徹きて心体開る事あり

其人に問て曰此何といふ經にて何方にて習ひ來り給ふるといふ客曰  
 是金剛經なり斷列黃梅縣の東禪寺に弘忍大師といふ人あり達广より  
 五代の祖なり其所より此經を聽受し來るといふ惠能急に志をたこし  
 黃梅に往て弘忍に謁せしむるをれも人其志を憐みて銀十兩をあたふ  
 惠能是を以母の衣糧を完て三十日を経て黃梅に至り弘忍を禮拜弘忍  
 曰汝何方の人や亦何を求るや惠能曰我の嶺南の百姓なり遠く此に  
 來りて師を拜する事ハ佛を作むことを求む此外に何欲か求めむ弘忍  
 曰汝の嶺南の撰據あり何う容易佛になるへけんや惠能曰人に南北わ  
 りといへとも弘性もど南北あし掲據の身と和尚とたなしからずとい  
 へとも佛性何ぞ差別あらん此時はや佛忍是只者にあらずと思はれけ  
 れとも何とあくもてあし汝衆に隨て佛前の務をせよといはれけ色ハ  
 惠能曰我自身毎に智慧と生して自性不離和尚何の務欲かあさしむ

るや弘忍曰汝の至極の大膽ものなり重ねて物云ことなかれとて裏の  
 碓房へやりて薪をわらせ碓をふましむ八ヶ月と經て初て弘忍碓房よ  
 來りて惠能に謂て曰吾初より汝の器量と知るといへとも悪人のため  
 へ害せられむことを恐れて汝と道と語らず汝我心を知るや惠能曰吾  
 も亦師の心を知る故に和尚の許にゆかずといふ其後弘忍大衆を集め  
 て曰我汝に向て説世人生死事大也汝等終日只福田(再生之福を云)を求て  
 生死の苦海を出離することを不求自性若迷ひ、再生の福何と救へさ  
 汝等各々去てみづから智慧を看みづから本心般若の性を取て各々一  
 偈と作り來つて我呈せよ看て若大意を悟る者あらん達广以來相傳の  
 衣鉢を與へて第六代の祖とせん火急に速かに去れ遲滞することあか  
 れ思慮せの意識に落て用不中見性の人若如此者ハ輪刀上の陣にも  
 亦見ることを得ひ衆皆迴議して其中の教授師神秀に責む神秀不得辭

をづく一傷を作り南廊の壁に書付置て退く其傷に云

身是菩提樹 心如明鏡臺

時々勤拂拭 勿使惹塵埃

弘忍此傷を見て神秀かいたまた自性を悟らさることを知る然とも大衆に示して曰此傷を留めて誦持せよ此傷に依て修せは惡道に墮することをまぬかれむ此傷に依て修せは利益あらんと云て門人に命じて香を焼て禮敬せしめ此傷を誦せし即見性を得むといふ門人皆傷を誦して善哉と歎き其夜三更に弘忍神秀と呼て曰傷は是汝か作なりや曰然り師は曰汝いたまた本性を不見只門外に至ていたまた門内に不入如此の見解を以て無上菩薩を覓ども了不可得無上菩提の言下は自の本心を識り自の本性を見て不生不滅あることを得べし一切時中にたいて念々みづから見て万法滯なく一真一切真万境わのづから如々也如々の

心即是眞實也若如此見の即是無上菩提は自性也汝且く去て再ひ一傷を作り來れと神秀自得せること能はさるれより兩日あつて一人の童子神秀か傷を誦えて碓房の傍を過く惠能問て曰は何の傷り童子曰神秀上座自得の傷又して大師の深く讚歎し給ふところ也汝何そ是を知らん惠能曰我碓を踏む八月月いたまた曾而堂前に至ることおし願はくは我をつれて堂前に至れ此傷と禮拜せん童子即導く堂前に至る惠能傷を拜了して我も又一傷あり我物かくこと能はそ吾か爲に書せよといふ衆みな笑ふ江州の別駕張日用といふ者人の侮るべからせと云て筆を執て即書す其傷は曰

菩提本樹無 明鏡亦非臺

本來無一物 何處惹塵埃

衆皆驚く弘忍衆の驚くを見て心甚歡喜すれども彼惡人の爲に害せら



れんことを恐れて是いまた見性せざる者の傷ありとて鞋を以其傷を  
 擦し去る次の日夜更て碓房より入惠能か石を腰に付て碓を踏を見て曰  
 道を求めるの人法のために身を忘る事當に如此成べしや因て問米精た  
 りやいさや惠能か曰米のよく精たれとも節人なし弘忍杖を以碓を三  
 度拍て歸惠能心得て夜三更に至て師の室に至る師袈裟を以て圍て其  
 來るを人よしらしめずためよ金剛經を説く應無所住而生其心とい  
 ふところにて惠能言下に大悟す一切の方法自性を不離事を遂ふ師よ  
 謂て曰何り期せむ自性もとをのつから清淨あることを自性もと生滅  
 なし何ぞ期せむ自性もとをのつから具足あることを自性本來動搖お  
 し自性よく方法を生すと師其本性と悟ることを知て頓教及衣鉢を傳  
 へて去らしむ人これを知ることなしなを愚人のためよ害せらるんこ  
 とを恐れて師みつから送て九江澤に至て別かる惠能南行して大庾嶺

よ至り時わんのごとく數百人跡より追來て衣鉢を奪はむとそ其中よ  
 惠明と云ものまつさきに進て追付たり惠能即衣鉢を石上に擲捨此衣  
 の信を表す力を以奪へけんやとて其身の草の内に陰居る惠明も流石  
 本心よ耻て衣をとること不能此ところをさして大磐石のごとくにて  
 不動といふ惠明呼て曰我の衣鉢を奪むために來るにはあらず法のた  
 めに來るなり願はくは出て一句をしめせと云惠能出て石上に座して  
 曰汝法の爲に來らば諸縁を止よ一念を生ずることなかき吾汝かため  
 よ説む良久して曰不思善不思惡正與麼時那箇是明上座本來面目惠明  
 言下に大悟す其後惠能曹溪に至り又惡人のためにさがさきて獵師の  
 中に隠れ居て獵師の肉を煮る鍋の中へ菜大根を切みとみに煮て菜  
 大根ばかりを拾ひあげて食し居たりそれより十五年を経て廣州の法  
 性寺にて印宗法師涅槃經を講ずるところに至る時に風吹て旛を動か

一僧曰風動くと一僧曰旛動くと互に論してやまず惠能進て曰是  
 風比動くよわす旛の動くにわす各の心動くと云衆皆駭く印宗聞  
 て是只人よわす黄梅の衣法南に来ると聞定めて此人成べしとて呼  
 て内よ入て問惠能曰然り印宗作禮して衣鉢を拜し因て問黄梅の附属  
 如何か指授する惠能曰指授の即なし唯見性を論して禪定解脫を論せ  
 せ印宗曰何を禪定解脫を論せざる答曰是二法の是佛法にあらざるか  
 ためなり佛法の是不二の法なり印宗又問如何成か是佛法二不の法答  
 曰法師涅槃經を講して佛性をわかす是佛法不二の法なりと云々佛の  
 曰善根に有二一つには常二つは無常佛性の非常非無常是故に不斷  
 名付て不二とす一は善二には不善佛性の非善非不善是を不二と名  
 付蘊と界と凡夫の見二知者の其性無二也無二の性即是佛性なり印  
 宗説を聞て歡喜合掌して曰吾か經を購するの瓦礫れこと玄惠能の請

論の眞金のごとくと是よれぬて惠能をす、めて剃髮せしか師とし事  
 是より禪法中國より明らかなり是六祖大鑑眞空普覺禪師と号唐の  
 中宗の時なり御母則天后皇并中宗頻りに徴とめ病と稱して不出生涯  
 朝廷よ交らす在所の新州よ終り曹溪に葬る  
 初祖達磨大師も始めて中至よいたり一たび梁の武帝に謁し給ふ時武  
 帝曰我一生幾許の寺を建立し幾許の僧と供養し布施設齋を此功德如  
 何と問達磨無功德と答てそれより述て魏の國へ去り給ふ魏の孝明帝  
 の前にて菩提流支三藏と道を論して不叶終に少室山へ引籠り九年面  
 壁して二祖惠可よ法を傳へ終に菩提流支が爲に毒害せられて果給ふ  
 其後墓より出て芦の葉よ乘天竺へかへり給ふに逢たりといふ僧あり  
 心得かたし惣して大徳の人天命よ任せて私乃作爲を用ることなし  
 釋尊の墓より出て天に上り給ふことと聞ず惟禪者のかりにあらず孔

孟といへとも道の行はれざるどころは長居の仕給のすもとより富  
貴も取入ことなし惟禪者のみ氣違ひもの、やうと思ひ給ふな儒者と  
いへとも道のためは餓死するをもかへり見す孔子魯を去給ふ時  
炊かけたる飯を不食にかけ出し給ふ欲のふかき心より法のためなど  
いふて言をかこつけ富貴の家に取入をのれ奪くたればれ人のじやま  
もあり我か所作にもあふぬ事に口を入國の善をなしたる者ればし只  
欲心をさへ離るれ心も身も自由なるものなり

主意

有人曰御坊の出家かどれもへ儒教老莊とりまじへて口に任せて説  
給ふ誠の出家にはあらず雜學といふ物成べしまた兩部の儒道とい  
ふへき歟

二休曰各の御目曲尺次第に名といいかやうともつけ給へ我のものと人

なり頭を剃り出家なり刀をさせば武士あり歟をかつげの百姓ありか  
み棒を引つれの番太郎なり氣と形と離るの死人あり形の何になりと  
も成次第只人と生れたれば人の正体を不失を以て心ざしとせるのみ  
何をか人の正体といふ儒に天命といひ佛と法性といふこの正体  
情欲の爲に奪れやすき物あり是を奪れぬを學問と云修行と云釋迦の  
教も孔子の教も其本の此又外あらざ其正体より直も動き出る情を普  
提心といひ忠信といひ釋迦孔子色くも名を付て教へ給ふのみ教の  
手段の種々の異あり又水土にもよるへま其本を取失ひ末にか、はり  
てみつからは是とするを僻學と云本を知せして未を混してかぞへあり  
くを雜學と云名比爲利の爲に博く取扱ふを俗學といふ我のケ様も覺  
へたり各のいが、ねはしめ我の先我を接する也知る事の人に  
も語る迄也聞人わ聞次第よく用ひ給ふへ志惡鋪の用ひ給ふへからせ



跋

昇平百年士民擊壤鼓腹之餘平日遺情消閑其態亦多矣如此書可謂其中錄々者也言之雅俗又何擇一日書買持來示余々一見開笑因其請漫筆付之

戊申秋

孟方甫老人

再來田舎一休終

明治十九年九月四日翻刻御届  
同年 月廿三日出版

再來田舎  
一休 翻刻出版人

大阪府平民

寺井與三郎

同府下東區北渡  
邊町四十四番地

38

1

146

